
まあるいきもち

遊佐一二三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あるこきもち

【著者】

Z7799A

【作者名】

遊佐一三

【あらすじ】

ぼくは勉強ができない。正確に言つて、テストでいい点を取ることができない。みんなといつしょの「ふつう」になることが、ぼくやママを幸せにするんだろうか?小さな「嬉しいこと」をたくさん知つている、「ふつう」に混じれない「ぼく」の物語。

ぼくは勉強ができない。

正確に書つて、テストでいい点を取ることができるない。

たとえば算数の時間に、ゼロのまんまるを書いた時、そのカタチのあまりのかわいいらしさで、いつも「かわいい」とつっこむ。あとで書つて、テストの時間が終わってしまつ。

ゼロがかわいいと思つぼくの点数は、こつも限つなくゼロに近づく。いつも思つただれど、テストで上手に点を取れれば、ぼくは「ばか」と呼ばれないんだろうか？

ぼくは教室の窓の外で揺れる菜の花が、黄色い海みたいに揺れるのが、つきつきするくらいきれいなことや、空に浮かぶ雲をじっと見つめていると、地面が動いてくるみたいを感じて面白いことを知つてこる。

なのに、みんなぼくを「ばか」と書つのだ。
おねえちゃんはみんなと一緒にない、「あこつかだかり遊ばなこようにしてよ。」と書つ。

おねえちゃんさんはみんなと一緒にない、「あこつかだかり遊ばなこようにしてよ。」と書つ。

ぼくはそれは、すこし裏切りだと想つ。

ぼくの中には、おねえちゃんとおなんじ、パパとママの血があわせたものが流れているはずなのだから。

おなじものでできてるおねえちゃんが、ぼくの「じいを」「ばか」と並ぶのは、

これは裏切りに他ならない。

ぼくはたぐさんの「きれい」とか「かわいい」とか「おもしろい」を知っているし、

本を読むのも大好きだし、おしゃべりするのも好きだ。

ぼくができないのは、テストでいい点を取ることだけなのだ。

事件は春の日、とても天気の良こ、気持ちのいい日に起った。国語の教科書で「わくわく」ところ口トバが出てきた時、ぼくのアタマの中に、昨日まで食い入るよつて見つめたいた図鑑のきれいな蝶がひらり、ひらりと飛んできた。

ちゅうちゅ。

こんなかわいいコドバを作ったのは誰なんだろ？

ちゅうちゅ。

きれいでかわいくて、あつたかい春の日はぴつたりの、すくいな口トバ。

ぼくは裏庭のお花畠にひまわりが咲いていたくなつて、教室を飛び出した。

「きみたちの名前はなんてかわいいんだね。」つい、伝えたくなつたんだ。

先生は怒って、「またおまえか。」と怒鳴ったし、みんなは「ばかのすることだから。」と言つて笑つたけど、こんな天氣のいい日に、薄暗い教室で教科書を読んでるなんて、そいつの方がぼくにとっては、「ばか」に見える。

温かくて気持ちのいい日には、外で植物の作ったきれいな空気をいっぱいに吸い込んで、この世界は誰が作ったのかを、空を見上げながら考えるほうがいいに決まっている。

そうして、ぼくことひでの「すてきな一日」を過ぎて家に帰ると、ママがどんよりとした顔で、リビングのいすに座っていた。

リビングの棚には、ママが買つてきた「学習ドリル」が、ほとんど手つかずのまま並んでいる。

ママはいつもけんめい、「勉強しなさい。」と言つただけれど、ぼくの根気が続かないで、最後には悲しい顔になつてしまつ。だから僕は、ドリルを全部刻んで捨ててしまいたいのだけれど、せつからママが僕のために買つてくれたのかと思うと、それもできない。

ママを悲しませるのはイヤなので、ぼくも一生懸命になつて鉛筆の先を舐めながらページをめくるのだけれど、いつも心がどこかへ飛んでしまつ。

ぼくは、なぜぼくのところが勉強を好きになれないのか、どうしてもわからずになる。

ぼくがみんなみたいに、勉強ができるてテストでいい点を取れるなら、ママは悲しい顔をしなくていいのに。

おねえちゃんみたいに、棒の横に田玉の並んだ「ひやくてん」を得意げに見せびらかして、ママにこういっつされたいの。どんなにがんばろうとしても、ぼくの心は、勉強の方に向かないのだ。

前に、パパとママがぼくのことでケンカしているのを見た。

パパは、「オレの一派には勉強のできなにやつはない。」と怒鳴っていた。

ママは、ぼくがテストでまんまるの点を取ってきた時と同じように、悲しい顔をしていた。

あとでおねえちゃんが、「あんたがばかり、おとうさんとおかあさんが

けんかするのよ。」と意地悪を言った。

ぼくも、ママと同じよう、悲しい顔になってしまった。

ママが学校に呼び出された。

ぼくもいつしょに、先生のお話を聞いた。

理科の時間に、朝顔の花がだんだんと開いてくるビデオを見たので、朝顔をずっと見張っていたい気持ちでいっぱいだったけれど、ママも先生も真剣だったから、ぼくも一生懸命お話を聞いた。

「専門医を受診されたらどうですか?」

先生の言つたコトバの意味が、僕にはよくわからない。

「息子さんは学習障害の疑いがあります。」

やつぱり、わからない。

わかつたことは、ぼくが「たのしいこと」を見つかるたびに、

先生が困ることと、先生やみんながぼくに、もう学校に来ないで欲しいと
思つてこと、と二つだけだった。

ぼくは「ふつり」「ひやないから。

「ふつり」「ひり」ってこののはなんだろ？

ぼくが「ふつり」だつたら、チストでいい点が取れたんだろうか？みんなに仲間はずれにされたり、ママが悲しい顔をすることもなかつたんだろ？

「ふつり」「ひやないのせ、ぼくが悪いの？
どうすれば「ふつり」になれるんだろ？

ぼくは一生懸命考えたけど、どんなに時間をかけてもわからなかつた。

ぼくは初めて、じぶんが「ばか」なんぢやないかと悔しくなつた。

空はぼくの大好きな夕焼けだつたけど、ひとつも「うれしい」気持ちが降りてこなかつた。

「うれしい」と「たのしい」を心の中で何度も呼んだけど、喉に小石が

詰まつたみたいになつて、田の前がじわじわと水たまりに沈んだ。
なにもことばがでこなくて、久しづつに触つたママの手を、ぎゅっとつかんだ。

ママは何も言わずに、もつと強いかで、ぎゅーっと握り返してくれた。

僕は「がくしゅうじょうがい」とこいつのひっこ。

今までぼくが勉強ができなかつたのせ、ぼくのせこではなく、「し

「うがこ」と

よばれるもののせこだつたのだ。

理由がせつかりしたけれど、ぼくへの気持はますつきしなかつた。

「勉強ができないのは、しようがこのせいなんだ。」って言われるのは、

なんだか「仕方ないよね。」って諦めらわれていてるみたいで、かなしい気持ちがする。

ぼくは「ばか」とは言われなくなつた。

かわりに、「かわいそうな子」になつた。

ぼくはそっちの方が、ずっとこやだつた。

ママは、「まか」な子のママと、「かわいそうな子」のママと、ビッちちがいこんだり?

どうりでも、ママであることに変わりはない。

それは、「ふしふ」が欲しかったママこと、ママにして不幸なことなのだ。

お父さんのお母さんと、お父さんのお父さんが、

ママをこじめにきた。

お母ちゃんこそはこいつも向かにつけ、ママに意地悪を囁いて泣かせようとする。

だからぼくは、お母ちゃんが大めりこだ。

来るたびに、早く帰れ、とあつたけの念力を送る。

お母ちゃんこそはお母ちゃんが好きなの?」と聞いたり、羨ましく笑

ママのこととは本當だったんだ、と感心する。

「じや、ママはお母ちゃんが好きなの?」と聞いたり、羨ましく笑つてこた。

オトナコトバをしゃべる時、こころ難しからじ。

「おまえのいでんしがわるかった。」という話をしていた。
意味はよくわからない。

いでんし、というのは図書室の本でみたことがある。
ぐるぐると規則正しく回っていて、不思議なカタチをしていた。
いでんしは好きだけど、それが何をするものかはわからない。
だから、知りたいと思う。

世の中のいろいろなことが、不思議でしかたがないから、いっぺい、
いっぺい、

知りたいことが溢れている。

ぼくは忙しくて、テストの練習をしている場合ではないのだ。

次の日、ママは「学校に行かなくていいよ。」とぼくへ言つた。
「かわりに、いつしょについて来てね？」

ママに手をひかれて、区役所の並木通りを歩いた。
近くの木は大きいのに、遠くの木が小さいのはなぜだ？
遠くのちっちゃかつた木も、近くに寄ると大きい。
世の中は魔法みたいな不思議に溢れている。

「青い空は、宇宙の色が透けていいの？」と聞いたら、
「そうかな？じゃ、赤いお空はなにが透けてるんだろう？」とママ
が言った。

たしかにそつだなあと思つたら、不思議で仕方がなくなつた。
しばらく黙つて考え込んでいると、

「お空は神様の万華鏡だから、神様が振ると、色が変わるんだよ。」
と
教えてくれた。

素敵な答えだと思った。

「君の手とおんなじやつにしちゃ二つで、皿の上にいるおんなね。」

「なんで？」

「おまえはおまえなのに、おまえを見ようとしなかつたから。」

ママの言ひたことが、よくわからぬ。

『心』の『心』にたる』とに必死で おおきの素戔だとこ

ずっと見逃していた。

「ぼくがぼくのまんまで、いいっていいんだ?」

かたんてれかでなかた

『ソルジャー』が華やかさの極み、『アーヴィング』がさわやかさの極み。

ぼくは、ママがぼくのことを好きだと喜んでくれているのが

菜の花の海を見た時より、もう一ど
わがたから
れしに復帰す
になつた。

ママは、
区役所

わづかねど、これらなどと、今までと違つてしまひしこ。

「ゼロがまんまるでかわいいって、ママもそうゆうのよ。

まんまるかくまた 始めよ、ね。『ハレシ』を『ハレ』集めた

卷之十一

「おれがおまへ、おまへがおれ」おれおまへおまへおれ

踊りたいくらいだ。たけど、ママがゼロをかわいいと言ってくれた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7799a/>

まあるいはきもち

2010年10月10日07時09分発行